

自然物を採り入れた保育実践の研究

—幼児の豊かな感性を育てることを目指して—

岩本廣美

(社会科教育講座)

前田喜四雄

(附属自然環境教育センター、附属幼稚園)

上野由利子・竹内範子・木村久美・山田祐子・長谷川かおり・石田晶子・山口智佳子

(附属幼稚園)

Using Natural Fruits for Bringing up Children's Sensibility at the Kindergarten

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Kishio MAEDA

(Center for Natural Environment Education, Nara University of Education)

Yuriko UENO・Noriko TAKEUCHI・Kumi KIMURA・Yuhko YAMADA・Kaori HASEGAWA

・Masako ISHIDA・Chikako YAMAGUCHI

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

摘要：本研究は、自然物としての果実を活用した保育実践に、季節の推移と果実の成長変化を勘案しながら取り組んできたものである。その背後では自然物を活用することによって幼児の感性を育てることができるであろうという仮説を持っている。保育実践の結果、奈良教育大学附属幼稚園の自然に恵まれた環境構成を基盤に、幼児は多様な学びを獲得してきたといえる。担任の諸記録や担任と幼児との間に交わされた会話記録などは、奈良教育大学附属幼稚園の取り組みが幼児の感性を高めることに十分に寄与したであろうことを如実に示すものであった。また、これらの保育実践は保護者の関心呼び覚ましたこともわかり、保護者の理解のもとに展開してきたことがわかった。

キーワード：保育実践、自然物、果実、感性

1. 研究の目的と背景

本研究は、2005年度の教育実践総合センタープロジェクトのひとつとして取り組んだものである。研究の目的は、奈良教育大学附属幼稚園（以下「附属幼稚園」と記す）において、自然物を採り入れた保育実践を試み、その経過を具体的に記録・分析することである。また、こうした観点による記録・分析から、附属幼稚園の現行教育課程および環境構成の改善に向けた視点を抽出することも意図している。

本研究の背後には、園内で季節に応じて自然物を採り入れた保育実践を積み重ねていくことによって、幼児の豊かな感性を育てることができるであろう、という仮説がある。ここでいう感性とは、価値あるものに

気付く感覚であり、刺激に対する敏感さである（片岡1990）。また、本研究では、感性を五感すなわち視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚を通して気付く感覚であると捉えるとともに、五感の中でとくに味覚に注目し、自然物としての果実に関する味覚を通して気付く感覚に焦点化させる。自然物としての果実にとくに注目するのは、現代日本においては生活環境の都市化が進行したことや戸外遊びの減少などによって、それらの味覚に触れる幼児の経験が概して乏しくなっているためである（福武書店教育研究所1991）。また、幼児は「自然観察の中で“みたり”“きいたり”“さわったり”したものを“なめて、あじわう”ことの大切さをすなおに」示す傾向があると認識されているためでもある（山内1994）。これに関して小林・山田（1993）

は、感性による自然の理解をねらいとする触覚・嗅覚・味覚をともなった直接体験を原体験と呼んで意義付けを図ったうえで、幼児教育・学校教育・社会教育などあらゆる機会での原体験できる場を意図的に設定していくことが大切であると述べ、本研究に有力な示唆を与えてくれる。小林・山田によれば、原体験は自然物を7つの類型すなわち火・石・土・水・木・草・動物に分けて捉えることができ、本研究で採り上げる果実に関する味覚は、樹木についている果実を採取し食するという行為をともなうため、木の原体験に位置付けられる。

2. 園庭の環境構成要素としての果樹・果実

本研究で自然物のうち果実を取り上げた理由は、附属幼稚園がこれまでの園内環境構成にあたって、生食できる果実をつける樹木を意図的に植栽してきた経過を考慮したという点もある。

2005年度の時点で附属幼稚園内に植栽されている生食できる果実をつける樹木は、グミ・ユスラウメ・ヤマモモ・スモモ・ザクロ・キウイ・カキの7種類である。いずれも皮や果肉が比較的柔らかい液果類に分類できるタイプのものである。以下に、それぞれの果樹の特徴を簡単に記載しておく¹⁾。

○グミ (グミ科グミ属)

グミにはいくつかの種類があるが、附属幼稚園に植栽されているのはナワシログミ (別名ハルグミ) である。日本の本州中部以南に広く分布する果樹である。花は秋に咲き、翌年の5月から6月にかけて長径2センチていどの細長い実をつける。実の表面の色が赤く鮮やかなため、幼児の目に留まりやすい。皮は柔らかく皮ごと生食できる。やや渋みはあるが、酸味と甘味が強い。附属幼稚園のナワシログミは、樹高1.5メートルていどで、斜面に植栽されているため、枝に幼児の手が簡単に届く箇所もあり、幼児が実を採取することは容易である (写真1)。2005年度はとくに実が豊



写真1. グミを採取する幼児

富につき、保育にきわめて有用であった。なお、附属幼稚園にはアキグミも植栽されていたが、現在は枯れてしまい、消滅している。

○ユスラウメ (バラ科サクラ属)

中国華北地方原産で、日本には数百年前に渡来したといわれ、現在日本各地で園芸樹として定着している。大きなものは3メートルに達するが、附属幼稚園のものは樹高1メートルていどである。6月頃に径1センチていどの球状の赤い実をつける。皮は薄く柔らかいため皮ごと生食できる。酸味よりも甘味のほうが強く感じられる。2005年度は結実を確認できず、保育に活用できなかった。しかし、大学構内に植栽されているユスラウメは、結実が確認できたため、実のついた枝を少々切り取って保育に活用した。

○ヤマモモ (ヤマモモ科ヤマモモ属)

太平洋側関東地方および日本海側福井県付近より以西の日本各地に広く分布する果樹である。山野では樹高20メートルに達するものもある。6月頃に大きなものでは径2センチほどで球状の赤紫色の実をつける。種が大きいので可食部分は少ないが、表面は柔らかくそのまま生食できる。酸味、甘味ともに濃厚である。附属幼稚園には、樹高10メートル近い木があるが、これまでのところ結実を確認できておらず、保育に活用はされてこなかった。結実が確認できれば今後の活用は検討されてよいであろう。

○スモモ (バラ科サクラ属)

中国の長江流域が原産地であると推定されている。日本には古代以前に渡来し、現在までに多様な品種が開発され各地で栽培されている。附属幼稚園で植栽されているのは、メスレという品種で、樹高4メートルほどである。サクラ (ソメイヨシノ) とほぼ同時期に白い花を咲かせ、6月に径3~4センチほどの球状の実をつける。熟すと皮と果肉が赤みを帯びてくる。皮は柔らかいため皮ごと生食でき、甘味と酸味がある。2005年度は、結実を確認でき、保育に活用した。

○ザクロ (ザクロ科ザクロ属)

原産地ははっきりしないが、地中海東岸から北西インドにかけての南西アジア一帯で古くから栽培されてきた果樹である。中国には3世紀に伝わり、平安時代までには日本に渡来して各地に定着した。6~7月頃に鮮やかな赤い花を咲かせ、9~10月に長径5センチ以上の実をつける。実は熟すと皮が裂け、中の種子が露出する。皮はやや硬いため生食にはなじまないが、中身は生食できる。甘味もあるが、酸味が強い。附属幼稚園のものは樹高3メートルていどで、2005年度は結実を確認し、保育に活用した。

○キウイ (マタタビ科マタタビ属)

日本在来のサルナシの仲間である。シナサルナシとも呼ばれ、中国が原産地の果樹であるが、20世紀になってニュージーランドで栽培品種として開発され、

日本には1960年代に初めて導入された。つる性の樹木で、栽培するには柵を設置するのが適当である。栽培適地はミカンとほぼ重なり、西南日本は栽培適地である。5月頃に白い花を咲かせ、10～11月に長径数センチの果実が熟してくる。果実は採取後に追熟させてからのほうが生食しやすい。緑褐色の皮は毛状のもので覆われているため、刃物で皮をむいてから食べるのが一般的である。附属幼稚園のキウイは、2005年度は結実を確認できなかった。

○カキ（カキノキ科カキノキ属）

カキは古くから北海道を除く日本各地で栽培されてきた果樹であるが、現在日本で栽培されているものは中国原産の品種を改良したものであるといわれている。多数の品種からなるカキは完全甘柿、不完全甘柿、不完全渋柿、完全渋柿の大きく4つに分けられ、附属幼稚園に植栽されているのは、完全甘柿タイプの「富有」という品種である。これは樹高4メートルほどで、2005年度は結実を確認できた。附属幼稚園では2005年度、この富有品種のカキ以外に、保護者や地域関係者から不完全渋柿タイプの「平核無（ひらたねなし）」品種のカキと完全渋柿タイプの「鶴の子（つるのこ）」品種のカキをそれぞれ入手し、保育に活用した。カキの果実は品種によって大きさや形が異なるが、10～11月に熟す果実は、いずれの品種でも表面がつやのある鮮やかな茜色であるため、幼児の目に留まりやすい。また、いずれの品種でも、皮はやや厚いため、刃物で皮をむいて初めて生食できるようになり、渋柿の場合は一般に渋抜きをしないと生食は困難である²⁾。

以上説明した7種類の果樹のほかに、附属幼稚園の園庭には生食には向かないが果実をつける樹木に、液果類ではウメがあり、皮の硬い堅果類としてアラカシ、ウバメガシ、シラカシ、クヌギ³⁾がある。

ところで大澤（1999）は、幼稚園の園庭に植栽する樹木群に備わっているべき条件として、次の3点を挙げている。

- ①地域の自然植生をつくる樹種
- ②花・葉・実・枝・幹を教育内容に活用するのに適した樹種
- ③話題となる樹種

また、田尻・無藤（2005）は、「自然に親しむ保育」を目的とした環境教育プログラム開発の視点として次の5点を挙げている。
- ①保育者の力量の範囲で柔軟な活用ができる幅を持ったものであること
- ②日本の自然、特に身近な自然を活用するプログラムであること
- ③日本の文化および伝統を伝えるプログラムであること
- ④過大な負担がなく継続的に取り組めるものであること

- ⑤保育者の保育観や自然観が根底に流れ、幼児に伝えることができるようにすること

附属幼稚園に植栽されている果樹の特徴および以上の大澤（1999）と田尻・無藤（2005）の論点を総合すれば、附属幼稚園の果樹群は、保育に有用なものであることがわかり、保育プログラム開発の可能性を多分に備えたものであるといえる。

3. 附属幼稚園での保育実践の経過と記録

3. 1. 春から夏にかけての保育実践

5月から6月にかけて、グミ、ユスラウメ、スモモを活用した保育実践を展開した。事例1から事例6までの6事例の記録を得た。記録にあたって、担任の発言はT「」で、幼児の発言はC『』でそれぞれ記述した。幼児の年齢や氏名などを特定した場合は、それぞれ付記した。

事例1：5歳児の「グミの実とり」をめぐる担任の記録

5月連休明けから、グミの実やスモモの実の青いものが、草の上に落ちるようになり、その実を拾い集めては、「ままごと」のごちそうにしたり、ビニール袋に水と一緒に入れて「ジュース」にしたり、また、いくつかはポケットに潜ませて持ち帰ったりする姿が見られるようになる。青い実は食べられないが、赤く熟したら食べられることを伝え、枝についているものは採らないように注意を促す。幼児が家に持ち帰ったグミの実を見て、保護者が「何の実ですか？」と聞いてくるので説明するが、グミが食べられる実であり、幼児が木から採って食べさせてもらっていることを知って感動される方もいる。母親世代でも、木の実をとって食べたことがない、グミやスモモを知らないで育った人が多いようだ。中には小さい頃に食べた懐かしそうに話す人もいた。

事例2：グミをめぐる5歳児と担任との会話（5月24日）

今まではグミなどの実を採ったら給食室に持って行くことになっていた。赤く色づいてきたグミが増えてきて、採って食べる経験をさせてみたいので、それについて、ルールを決めることにした。

T「グミがおいしくなってきたけど、どうしよう？」

C『ためておく。』

C『おやつ部屋に持って行く。』

今まで、食べさせていなかったのに、すぐに食べたという意見が出ない。

T「イチゴは少しずつしかならないから、貯めておいてお料理しよう。グミはすぐ食べるとおいしいよ。」

C『29個（クラスの園児数）ためる。』

C『みんなの分採る。』

C『食べる時間がなくなったらダメやから、早く片付

ける・・・。』

T「採ってすぐに食べたくない？」

C『食べたーい。』

T「どうしたらいい？」

C『採って洗って食べたらいい。』

T「ひとりの子がどんどん食べてしまったらどうする？」

C『あかん。』

C『ためとく。』

C『1個だけにしたらいい。』

T「そうか。1個だったら、いいことにしようか。」

養護教諭から聞いたとして、実の洗い方を実際にグミを使ってやって見せながら説明する。

T「1個食べてしまって、もう1個採ってしまったらどうする？」

C『お友だちにあげる。』

C『ママにおみやげにしたい。』

C『まだ、食べてない子がいるから、あかん。』

C『みんなが食べてからならいいやんか。』

C『小さい組も全員食べたら・・・。』

事例3：グミ採取をめぐる5歳児と担任との会話およびその後の経過記録（5月26日）

木の高い部分に赤い実があるので、枝を引き寄せてやる。1個と限定されているせいか、時間をかけて選りすぐっている。

C『どこの水道で洗うの？』

C『種はどうするの？』

C『軸はどうするの？』

T「鳥と一緒に。種は土に返すんよ。」

すぐに食べられる状態の果実しか知らないのか、軸は食べないとか種はコンクリート面ではなく地面に捨てたら土に返ることは知らないようだ。軸を持って上手に食べ、軸付きのまま種を出せたのを喜んでいる幼児もいた。水道の流水で洗う際、水の勢いに負けてグミを落とす幼児も多く、そっと、でもしっかり実を持って洗うことも意外に経験がないと容易ではないことがわかる。

1個しか食べられないと決めていたため、大切な1個を、より赤いものにしようと真剣に選んでいた。また、十分時間をかけて1個を探すので、熟した赤い実を選べ、結果、甘くておいしいと言う感想をもてた幼児が多くなったようだ。反面、まだ、色が浅いものを食べてみて渋みがあるとか、甘くないという実感をもたせる体験はさせられなかった。しかし、ひとり1個のルールを決める前に、多くの幼児が、まだ熟しきっていない実を味わっているようであった。その経験から、赤いものを真剣に選ぶ行為が生まれていることもあると思われる。

事例4：グミ採取をめぐる5歳児と担任との会話（5月31日）

5歳児がプリンカップを持って、グミの木の下で実を選んでる。

C1『赤いので大きい方がいいよ。』

と言いながら、赤い実を選んでる。緑がかかった実を採っている幼児は一人もいない。

T「〇ちゃんは、食べたの？どんな味がした？」

C1『トマトの味。』

C2『プリンの味（プリンカップに惑わされているのか？）。』

C1『中に種が入っているねんで。ちょっと、酸っぱいで！』

C3『酸っぱかったから、嫌い。』

C1『（2個くっついているのを見つけて）サクランボみたいや。』

カップに入れたグミを4歳児のクラスに見せに行く。

C2『きれいに洗って、お弁当の時にあげるからね。』

近くにいた4歳児の数人が、遊ぶのを止めて寄ってきた。食べるものであることに関心が大きいようだ。4歳児は、期待はするものの、慎重な幼児は食べない。半数以上の幼児は、実を口に入れ、食べてみて、美味しいとか酸っぱいとか美味しくないとかの感想をもった。遊びに対しても物怖じせずに大胆に取り込める幼児は、初めての食にも、挑戦しようとするようだ。たとえ、おいしくない実にあたって、赤かったら美味しいかもしれないと、試行錯誤しながら色々な経験を重ねることが出来るのかもしれない。

事例5：ユスラウメをめぐる5歳児と担任との会話（6月10日）

大学構内になっているユスラウメの実のついた枝をもらってきて、5歳児のクラスで味見をする。枝から直接とりながら、すぐに洗って食べる。

C『サクランボみたい。』

C『グミよりおいしい。』

「ユスラウメ」という果実の名前を知っている幼児がいる。グミを食べた経験のあと、保護者から教えてもらったのであろうか。

事例6：スモモの生食をめぐる3歳児、4歳児の反応（6月23日）

たくさんスモモが枝についているが、木の高いところにしかないので、用務員の男性に採ってもらう。各クラスでおやつ時間に食べる。グミの実よりは好評で、食べる幼児が多かった。何人かは口にしない様子である。

C-3歳児『これ、リンゴ？』

誰もスモモを知らなかった。残した幼児もいたが、2個食べた者もいた。

C-4歳児『酸っぱかったけど、おいしかった。』

C-4歳児『天国みたいな味だった。』

ほとんどの幼児は、皮ごとかじっていた。

C-4歳児『いらない。（と言いつつ、皮をむいてか

じってみる) 食べれる。』

3. 2. 秋の保育実践

10月から11月にかけて、ザクロとカキを活用した保育実践を展開した。事例7、8の2事例の記録を得た。記述のしかたは、(1)と同様である。

事例7：ザクロ採取、生食をめぐる5歳児の反応 (10月6日)

10月に入り熟したものを採り、クラスに1、2個を配り、分けて食べてみる。

C『1つずつはおいしいけど、たくさんはいらない。』

C『1粒、嚙むとジュースみたい。ザクロジュースって飲んだことある。』

C『形と色がきれい。ゼリーみたい。』

食べた後、種を大事そうに持っていて、土の中に埋めてみるという嬉しそうにしている。

C『美味しかったから、埋めていっぱい食べれるようにする。』

1粒を口に含み、ちょうど抜けている前歯にはめて、「入れ歯!」と言う幼児がいた。ちょうど、歯の大きさと同じくらいだと気付いたようだ。

事例8：カキ、干し柿をめぐる5歳児と担任との会話 (11月25日)

T「ここに持ってきたんやけど。(柿を差し出す。)」

C『柿!』

C『渋柿!』

T「何でも食べよう大作戦!で今までみんな何食べた?」

C『カボチャ!』

C『ホウレンソウ!』

(渋柿を見せる。)

T「渋柿渋柿ゆうてるけど…」

C『甘柿?』

C『つるし柿?』

(担任が渋柿を出す。)

C-MT『これ渋柿-?』

T「甘いと思う?」

C『うん。』

T「Tちゃん食べたことある?」

C『ある-。』

T「SEちゃんは?どんな味した?」

C『…』

T「普通の味やった?」

C『うん。』

(MTがすごく渋そうな顔をする。)

C-SA『私苦手やから食べられへ〜ん。』

T「苦手ゆうてたらどうなる?」

C-みんな『苦手になる〜。』

(担任がつるし柿を出す。)

C『つるし柿〜。』

C-ST『渋柿がおいといたらつるし柿になんねん。』

T「なんでしわしわなんやろ?」

C『太陽に当てたから。』

C-MC『あつくて。』

C『さわりた-い。』

(担任が渋抜きした柿を出す。)

C『食べたくない。』

C-SA『わかった!焼酎!』

T「お当番さん柿取りに行ってくれる〜?」

(当番の子どもが用意された柿を持ってくる。)

T「柿柿探検隊!」

(担任が一番目の渋柿を配る。)

C『まだ食べたあかん。』

C『まだあかんで〜。』

C『甘い!!』

C『あかんで。』

C『まだやで!』

T「持った?」

(幼児が各自食べる。)

C『おいしい。』

C『おいしい。』

C『ちょっとだけ渋い。』

C『甘い。』

C-MC『最後ちょーっと渋くなった。』

C『苦くなった。』

(SEが持参した茶を飲む。)

C-ST『甘かった、最初は。』

(他の幼児も多数お茶を飲み出す。)

C-SA『もういややもういやや。』

C-TK『口がしゅわしゅわになった。』

C-TA『口が砂みたいになってきた。』

T「渋柿平気やった人-?」

C『は-い。』

(MTが食べる。すごく「渋い顔」になる。)

T「とっておきに挑戦したい人-」

C『は-い!』

C『は-い!』

C『は-い!』

(幼児は渋柿を楽しんでいる様子も見られる。)

(渋くて顔が中心による幼児がたくさん見られる。)

C『Yくんが吐いた-。』

C『まっずい!』

C『カサカサ。』

C『うっげ。』

(担任がつるし柿を出す。)

C『くさ-い。』

C『イカのおい。』

(幼児が渋柿を食べる。)

C『かたっ。』

C『苦い。』

- C-E 『おいしーグミみたい！』
 C 『にがーい。』
 (担任が感想を尋ねる。挙手した幼児を指名し、発言を促す。)
 C-U 『おいしかった。』
 C-E 『グミみたいーい。』
 C-N 『おいしかった。』
 C-SE 『グミみたい。』
 C 『あまい。』
 C-TA・SE 『もう1個食べたい。』
 C-R 『あとで酸っぱくなってきた。』
 C-SA 『めっちゃ甘かった。』
 C-K 『イカのおいだった。』
 C-SA 『ゼリーみたいだった。』
 T 「ゼリービーンズやな。』
 C-MC 『ガムみたい。』
 (多数の幼児から出た意見をもとに担任が言う。)
 T 「お菓子みたいやね。』
 (担任が渋抜きした渋柿を出す。)
 T 「どんなにおい?』
 C 『おいしー。』
 C-Y 『くさい! くさい! くさい!』
 (幼児が渋抜きした渋柿を食べる。)
 C 『ヌルヌルでおいしい。』
 C 『めっちゃおいしい。』
 C 『普通の柿みたい。』
 C 『おいしかった。』
 C-SA 『先生、もっと食べたい。』
 (担任が渋抜きの「秘密」を話し始める。)
 (説明途中でまだ食べていた幼児が言う。)
 C 『おいしいでー!』
 C 『うめー。』
 C-SA 『Rちゃん1個も食べてないねん。』
 (担任が説明を再開する。)
 T 「お酒。すごーい強いお酒の中に…。』
 C-TK 『(担任の説明を遮るようにして言う。新聞に包むねん!』
 T 「お酒の中につけて袋に入れるとととと甘くなるんや。おうちの人に教えてあげて。』
 C 『いやー秘密なんやろ!!』

4. 考察

4. 1. 幼児の感性を育てる観点から

現代の子どもにとって、果実(くだもの)は、スーパーマーケット等で売られているものを食べることが一般的になっている。多くの子どもは、それぞれの果実がどのような姿で果樹の枝についているのかを認識することなく、商品としての果実に接しているといつてよい。しかも、日本国民のひとりあたり果実消費量

は、年々減少しており、いっぽうでジュース等の消費量は増加していることから、生活の中で果実自体に接する機会が減少している⁴⁾。

このように、幼児をめぐる生活環境が変化してきている現今においては、人間の感性の基礎が形成されようとする幼児期に、自然物としての果実の味覚に触れさせる意義はきわめて大きいものがあると考えられる。果実とは、本来、人間の身の回りの山野で、季節に応じて果樹の枝についたものを直接採取し、生食できるものと生食できないものとの区別を試行錯誤しながら認識してきたものであると考えられるからである。生食できないが、何らかの加工を施すことによって食べられるものに変化せしめることを発見してきた場合も多々あったと考えられる。そうした認識の過程で人間は感性とくに味覚に関わる感性を働かせてきたと考えられ、感性を育てる意義は大きいといえよう。また、スーパーマーケット等で商品として売られている果実は、人間が認識してきた果実群の中で、味覚に優れている、可食部分が比較的大きい、果樹が栽培しやすく労力を費やすことによって収量増加が見込める、といった諸条件を備えるものが選択されてきたものであることがわかる。

このような観点から附属幼稚園での自然物としての果実を活用した保育実践を評価してみると、次のような特徴があることに気付く。

植栽し、活用している果実には、商品として一般化しているものと、商品としては必ずしも一般的でないものがあり、附属幼稚園の幼児は両方のタイプの果実を生食できる機会を持つことができる点が重要であると思われる。2005年度の保育実践で活用した果実で商品になっているものには、スモモ、ザクロ、カキがあり、一般化していないものには、グミ、ユスラウメがあった。2005年度は活用できなかったものでは、キウイは商品化しており、ヤマモモは商品として一般化していない⁵⁾。このような両方のタイプの果実を枝から採取して生食する機会を持つことは、果実の本質を感性レベルで体験的に学習するうえできわめて重要なことであると思われる。とくに、グミは、幼児が容易に枝から採取してただちに生食できるものであり、きわめて有用な素材であるといえる。しかも、保育実践の記録からは、グミがまだ青い段階から観察させており、赤になると食べられるようになることを幼児に教えていることがうかがえる。

次に、渋柿のように生食はできないが、加工すれば味覚を楽しめるタイプの果実も積極的に取り上げ、渋柿と渋抜きをしたカキの両方を食べる機会を設定している点が重要であると思われる。我々の通常の食生活においては、渋柿を食べる機会はないため、場合によっては、渋柿の存在や味覚を感性レベルで認識することなく子どもが成長してしまう場合もあると考えら

れる。しかし、附属幼稚園での保育実践のように、同じ種類の果実で食べられる場合とそうでない場合とがあることを体験的に学ばせることによって、人間の認識能力に無理なく気付かせることができるようになるものと思われる。保育場面で担任教師が「秘密」と表現した渋抜きの方法は、幼児の段階では理解しにくいものであろうが、やがて成長とともに、気付いていくものと期待される。

4. 2. 教育課程と環境構成の見直しの観点から

附属幼稚園では、2001年度に教育課程を年齢別・季節別に編制して以降、2005年度までそれを踏襲して保育を展開してきた。その2001年度版教育課程では、果実に関して具体的に言及している内容は、5歳児の場合、Ⅳ期（10月～12月）の次の箇所のみである。

「ドングリを用いた鹿せんべいや吊し柿をつくることなどをとおして、自分たちの生活の中に自然物を取り入れていく経験ができるようにする。」

実際には、2002年度以降、計画には明記されていない場合でも、幼児が園内で果実の存在に気付いており、2005年度の保育実践で取り上げた内容は、部分的に先行している。たとえば、2004年度の次のような保育記録がこれに該当する。

柿がおやつに出されたけれども、柿を食べたことがない幼児が相当数いたようだった。「一人一切れ食べてもいいよ。」という言葉掛けにも、反応が薄く、不安そうな表情を浮かべた幼児もおり、「いらぬ」「食べない」と言う幼児が多数いた。担任が「甘くておいしいんだよ」と言っておいしそうに食べ始めると、数人の幼児が、柿の入った皿に寄って来て「食べてみる」と柿を口に入れた。「甘くておいしい」と担任の言葉を繰り返す幼児やもう一つとおかわりしたがる幼児もいた。それにつられて、食べてみようとする幼児が増えた。食べてみて、やっぱりおいしくないと言って残した幼児は3人いたが、食べてみようとする気持ちをもち、実行できたことを評価したい。食べたことのない物を口にするのは勇気がある。どんなものだろうと不安と期待をもちながら、担任の行動や働きかけを見て、一歩踏み出せる幼児と、どうしても挑戦できない幼児とは、何処に違いがあるのだろうか。担任に信頼の気持ちをもち、担任の働きかけを信じて素直に応じようとする気持ちをもてる幼児は、担任や友達の励ましによって、新しい環境に対しても受け入れ、順応していけるように思う。幼児たちがこれから成長していく中では、周りの環境に積極的に働きかけ、それを取り込んでいけることのできる力が必要だと思われる。担任（大人）の言葉を信じ、受け入れられる幼児に育てるには教員はどのように努力したらよいのだろうか。（2004年11月、3歳児担任の経過

記録および所見）

2005年度の保育実践の結果から、2001年度版教育課程にはない事項が、5月から6月にかけての時期（グミ、ユスラウメ、スモモ）と10月から11月にかけての時期（ザクロ、カキ、キウイ）については、果実に関する内容がかなり加えられてよいことが明らかである。ただし、果樹には、結実の多い年（なり年）と少ない年（ふなり年）とがあるため、実際の保育展開にあたっては弾力的な運用が必要である。また、季節の推移が年ごとに異なるため、絶えず園内の環境の観察に努めつつ、実践していく必要もある。

2005年度の保育実践の結果、附属幼稚園内の果実に関わる環境構成には、改善の余地があることも明らかとなった。主要な事項を列挙すれば次のとおりである。

- ①2005年度の保育実践で活用した果樹の多くが「子どもの森」の斜面際に集中しており、また、それぞれが接近し過ぎている場合が見られる。斜面際に集中していることから、グミのように斜面に設置された階段から幼児の手が容易に届く場合もあるが、その他は斜面側から果樹自体への幼児の接近が困難である。また、南側に樹高の高い他の樹木があるために日当たりが必ずしも良くない果樹があり、果樹の生長にとって理想的な条件を備えているとはいえない。したがって、今後機会を見て、条件の良い場所に順次新たな若木を植栽し、果樹に関わるより望ましい環境構成に努めていく必要があろう。
- ②現在の附属幼稚園の場合、5～6月、10～11月は保育に果実を活用できるが、その他の時期では空白が生じている。したがって、柑橘類など、より多品種の果樹を植栽することにより、より多面的な保育実践が展開できるものと思われる。先に挙げた大澤（1999）の論点を参考にすれば、たとえば、ナツミカン、ブルーベリー、ブドウ、アケビ、キンカンなどがその候補になると思われる。

5. まとめ

2005年度の附属幼稚園の取り組みのひとつとして、自然物としての果実を活用した保育実践に、季節の推移と果実の成長変化を勘案しながら取り組んできた。その結果、附属幼稚園の恵まれた環境構成を基盤に、幼児は多様な学びを獲得できてきたように思われる。担任の諸記録や担任と幼児との間に交わされた会話記録などからそれが十分にうかがえる。たとえば、樹木の中にはグミ・スモモ・ユスラウメなどのように枝についている実を採取後ただちに生食できるものがあることを、直接体験を通して学んだといえる。さらに、グミの実には青いものは生食になじまないが赤く熟したものは味覚的に優れることや、カキの実には黄色に熟して外見的には似ているものでも渋くて生食困難なも

のと甘味があって味覚に優れるものがあることなどを、体験を通して感覚的に学んだと考えられる。こうした学びは、幼児の日常生活の中で、ものごとへの関心や挑戦意欲などを高めると同時に、味覚をはじめとする諸感覚を通して感性を高めることに寄与したと考えられる。

いっぽう、本研究で進めたこれらの保育実践は保護者の自然物への関心を呼び覚ましたことがわかる。その一例として、幼児が家庭に持ち帰ったグミなどの果実が食べられるものであることを知り、附属幼稚園の環境構成を再認識するとともに、附属幼稚園では幼児が良質な自然体験を獲得していることを実感していることが挙げられる。本実践は、保護者の理解と信頼のもとに展開してきたといえそうである。

自然物として、2005年度は果実に重点を置いて保育実践に取り組んだが、自然物には園内だけでも他に多様なものがある。果実の活用のさらなる充実とともに、他の要素についても保育実践研究を進めていくことが今後の課題として挙げられる。

付記

本報告の文責は岩本廣美にあることをお断りしておく。

注

- 1) 記載にあたっては、柳ほか(1982)、小林(1986)、堀田ほか(1989)、有賀・小林(2002)、鈴木・岩瀬(2005)を参照したほか、筆者らの観察結果および大学事務局の資料も参考にしている。
- 2) 渋柿の渋は、果肉に含まれるタンニンが水溶性であると噛んだ際に舌で渋みを感じ、生食の障害になる。タンニンが不溶性に変化すれば噛んだ際に渋みを感じることがなく、生食の際に問題とはならない。「渋抜き」にはさまざまな方法があるが、タンニン自体が果実の外に出ることではなく、タンニンの性質が不溶性に変化することである(小林1986)。
- 3) これらの堅果類はいずれもブナ科樹木の果実であり、通称ドングリと呼ばれるものである。附属幼稚園では、各種のドングリを製作など幼児の活動材料として活用しているほか、「鹿せんべい」に加工し、奈良公園での園外保育の際にシカに与えるなどの活用もしている。
- 4) 『日本国勢図会』(2004/2005年版)による。
- 5) 稀には、グミ、ヤマモモなどが商品になっている場合が見られる。

文献

- 有賀達府・小林幹夫、『家庭で楽しむ果樹栽培』、日本放送出版協会、2002年、191ページ。
- 大澤力、「環境教育」の視点からみた幼稚園園庭樹木の現状と活用の課題、環境教育、8巻2号、1999年、55-63。
- 片岡徳雄、『子どもの感性を育む』、日本放送出版協会、1990年、222ページ。
- 小林章、『果物と日本人』、日本放送出版協会、1986年、235ページ。
- 小林辰至・山田卓三、環境教育の基盤としての原体験、環境教育、2巻2号、1993年、28-33。
- 鈴木邦彦・岩瀬徹、『野外観察ハンドブック校庭のくだもの』、全国農村教育協会、2005年、135ページ。
- 田尻由美子・無藤隆、幼稚園・保育所における「自然に親しむ保育」を中心とした保育のあり方について、環境教育、15巻1号、2005年、11-20。
- 福武書店教育研究所、『モノグラフ・小学生ナウ11巻5号、環境教育』、福武書店、1991年、60ページ。
- 堀田満ほか編、『世界有用植物事典』、平凡社、1989年、1492ページ。
- 柳宗民ほか監修、『くだものと野菜の本』、講談社、1982年、320ページ。
- 山内昭道、『幼児からの環境教育』、明治図書出版、1994年、196ページ。